

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2013.03) 平成23年度:147-150.

エイズ治療を受ける長期療養生活を支える力

矢羽々みえ子、伊藤廣美

エイズ治療を受ける長期療養生活を支える力

外来ナースステーション 看護部 矢羽々みえ子、伊藤 廣美

【目的】

長期療養の壮年期エイズ患者の主体的な療養生活を支える力を明らかにし、看護援助を検討する。

【方法】

壮年期でエイズ発症から4～5年が経過した患者2名に半構造化面談を実施し、帰納的・記述的方法を用いて分析を行う。

【倫理的配慮】

研究参加者には研究の趣旨、方法、研究参加の権利、匿名性・守秘性の保障を書面と口頭で説明をし、同意を得た。

【結果】

療養生活を支える力は、5つの内容が明らかになった。発症の衝撃を思い返しな
がら、病気になったことは仕方がない、自己責任だという思い、病気以外の話をしたいという語りから「誰かと語り病気を受け止め、前向きな自分を確かめようとする力」、同病者の情報から自己を確認し安心へ結び付けよ

うとする「他者と比較し自己を見つめなおす力」病名をオープンにできないことの劣等感、抑圧をネット上でのやり取りで表現し「自己の存在感を確認し自信をつける力」自分は自分という信念、無理をせず自分らしさを維持しようとする「生活のリズムづくりの信念」同病他者へのメッセージを發しそれを「自分自身への励ましと役割として意識する力」によって療養生活を継続していた。

【考察】

長期療養のエイズ患者は発症を衝撃と感じそれを振り返りながらも現実を見つめ希望へと変化させるために語ることのできる相手の存在を求めている。しかし病名に対する劣等感を感じ自己責任として受け止めようと向き合っている。また同病他者へのメッセージを發することが自身の役割と意識している。そのため看護師は、感染を受け止め、生活を前向きに考え自分なりの調整方法を見いだせるよう語りの機会を持ち、その中で患者の周りの人間関係について関心を向けながら、社会資源や情報を得られやすいように働きかけ、さらに患者が役割意識を持てるように関わることの重要性が示唆された。

エイズ治療の 長期療養生活を支える力

旭川医大病院

看護部 矢羽々みえ子、伊藤廣美

はじめに

- ✔ エイズ治療の困難事例には面接を通して様々な支援を行なっている。
- ✔ 「優秀」な患者の治療・受診行動を維持する力については十分な検討がされていない。
- ✔ 長期療養生活を支える力について理解することは、行動の主体としての患者への援助を促進できると考える。

研究方法

1. 対象
エイズ治療を始めて4年以上を経過した患者2名
2. データ収集期間
平成22年6月中の2日間
3. データ収集方法
半構造化面接法
研究参加者1名につき1回30~40分以内を設定
ICレコーダーに録音して逐語録をおこした
面接内容は感染が判明してからの今日までの生活と思しい

分析方法(質的帰納的分析)

- ✔ 面接内容を逐語化し、意味を損なわないように単文、1記述単位としてコード化した
- ✔ コードを統合し比較検討してサブカテゴリーを抽出
- ✔ サブカテゴリーを統合、比較検討再編を繰り返しカテゴリーを抽出した

倫理的配慮

- ✔ 研究目的および趣旨、研究への自由な参加、プライバシー保護、研究参加による不利益が生じないこと、データの保管には最新の注意を払うことなどを文書で表し、さらに口頭で説明し同意書に署名を得た。
- ✔ 面接は、プライバシーの保たれる個室を利用した。

結果

- ✔ 対象は2名40代と50代男性
- ✔ 平均時間は34分間
- ✔ エイズ発症にて感染が判明し本人に告げられる
- ✔ 発症時は重症肺炎で生命的危機状態にあった。
- ✔ 現在外来通院可能、日常生活自立、未就労
- ✔ 全コード 134 サブカテゴリー10 カテゴリー5が抽出された

カテゴリー1: 誰かと語り病気を受け止め、前向きな自分を確認しようとする力

サブカテゴリー	コード(一部抜粋)
感染への率直な感情の振り返り	先が真つ暗というのが事実
	晴天の霹靂というか「まさか」と
	5年経ってもやっぱり眠れなくて
	自己責任だからしょうがない
語りたい気持ち	そこを言えるまで大変でした
	昔友達だった人と話をしたい
	ソーシャルネットでも病院でも言える人が独りでもいと軽くなる
前向きにと自分に言い聞かせる	立ち向かおうという気持ちが心の底に度々あった
	面と向かって逃げないで大切ですよ
	前向きにいい意味強く保つこと

カテゴリー2: 他者と比較して自己を見つめる力

サブカテゴリー	コード(一部抜粋)
他人と自分の状況を比較	自分は自分なんだ
	他人の真似は出来ないし自分らしく生きたい
	皆が明るく輝いていて自分もやってみようと思った
ものの見方の変化	体の不自由な人でも生きている
	周りの環境がどんなに不幸でも自分の捉え方で違ってくる
	物事一歩引いて冷静に見られるって有難い

カテゴリー3: 自己の存在感を確認し自信をつける力

サブカテゴリー	コード(一部抜粋)
自分の存在感を確認する	くよくよしてもしょうがない、それも自分に与えられた道
	介護は大変だと思っていないけど皆が助かると言ってくれる
自分の力を信じる	自分は立ち向かえる状態なのでそこがたぶん受診できる理由
	悩みがあってそれに負けない内から湧き出す生命力
	何年後はこうしたい、できたらいいと希望を持たないと

カテゴリー4: 生活のリズム作りの信念

サブカテゴリー	コード(一部抜粋)
自分らしい生活の基盤作り	頑張らない介護をしている
	病気ばかりじゃなくて日々の生活で楽しいことも一杯ある
	時間を見ながら薬を飲むのは大変だけどそれを乗り越えていけば、それがリズムになる
	お題目を唱えたとすがすがしい気持ちになった
	波があるが買い物したりご飯作ったりしています

カテゴリー5: 自分自身への励ましと役割として意識する力

サブカテゴリー	コード(一部抜粋)
感染者を通して自己への励まし	落ち込まないで乗り越えていこうよ
	人生悪いことばかりじゃないよ
	そのうちいい薬も出てくると期待しよう
	病気になっても負けないでいこうよ
役割意識	自分にしか出来ない役目・使命がある
	患者さんに対して僕の思いを伝えるのも使命
	病状とか言ったほうがいいですよ、皆のために

考察1

- 死を自覚し、衝撃を乗り越えたことを実感できた体験を語ることで感情の整理・明確化を行っていた。
- 長期療養を継続している自分自身を振り返り、病気・生活・人生の見方を変えつつ自分を励まし、それを「語る」というコーピング方略を用いていた。

考察2

- 日常生活の中に病気の不確かさを自然なリズムとして受け入れ、他の感染者への励ましを通して、その言葉を自分の行動につなげていた。
- 他者と自分の状況を比較させながらの病気の体験が自己の存在感を確認し、自信をつけながら役割意識へと変化してきていた。

まとめ

- 語りを通して自分自身を振り返り、病気の生活・人生の見方を変えるというコーピング方略が療養生活を支えていた。
- 生活のリズムづくりは病気の不確かさを自然なリズムとして受け入れることにつながり役割意識へと変化してきていた。